

エチオピアの職業技術教育・訓練(TVET)機関 における実務訓練プログラム — 工場で学生はなにを学ぶか? —

島津侑希(名古屋大学)

shimazu@gsid.nagoya-u.ac.jp

背景①

- Technical and Vocational Education and Training (TVET)は、職業に直結した専門的技能の習得や向上を目的に行われる教育・訓練形態の総称
- TVETには様々な形態が存在するが、公的なTVET機関では、市場で必要な技能を十分に提供できていないと批判されてきた
 - TVET機関のみで必要な技能を十分に提供するためには、現場経験のある教員を採用したり、現場で使用されている設備をTVET機関内に整備したりする必要があるが、教員給与や設備費の確保が困難である

多くの費用をかけずにTVET機関で実践的な技能を提供する必要がある

背景②

市場で必要とされる技能を確実に修得するため…

エチオピアではTVET機関と企業が連携した「**実務訓練プログラム**」を導入

- TVET機関で基礎的な技能を学んだ後、実践的な技能を地元の受入企業での実務を通して身に着けることを目的とする
- TVET機関での授業時間: 受入企業での実務時間 = 3:7
(一週間のうち1~2日間をTVET機関、3~4日間を受入企業で過ごす)
- TVET機関は多額の設備投資をすることなく実践的な技能を学ばせることができ、受入企業は就職後に即戦力となる人材を早い段階から育成できるとされる

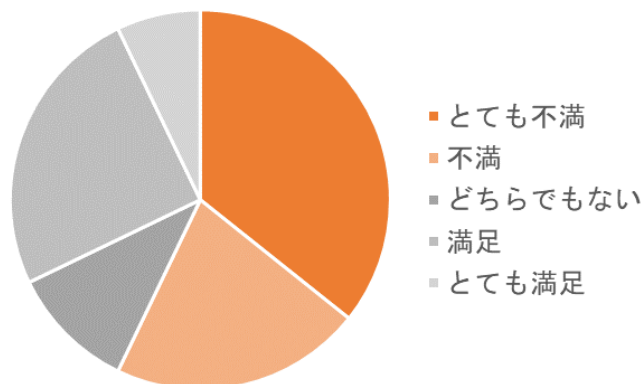
背景③

しかし実務訓練プログラムの評価は高くない…

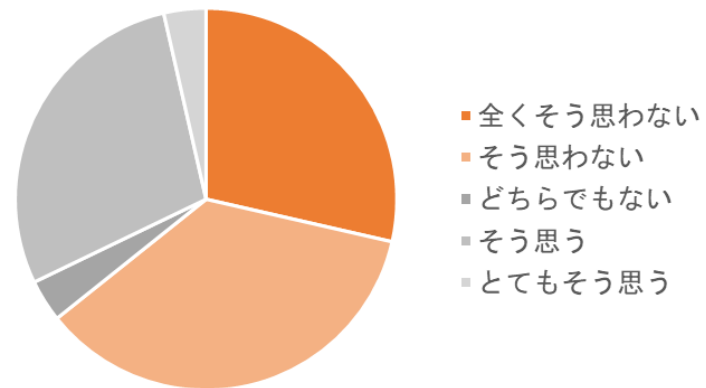
- 同プログラム導入後も、TVET機関の修了生は未だに現場で通用する十分な技能を有していないと指摘されている(Tolla 2016 他)
- TVET学生にとっても魅力的なものであるとは言い難い

例) 報告者が参加するプロジェクトでTVET機関①で学生28名に実施した調査

実務訓練に満足していますか？



企業は適切な訓練を提供していますか？



なぜ半数以上の学生が反対するのか？

(SKY 2016)

本調査の概要

＜調査目的＞

実務訓練プログラムの現状を把握することで、

- 学生が実務訓練を魅力的に感じない要因を明らかにする
- 実務訓練を通して学生はなにを学ぶかについて考察する

＜調査方法＞

以下の二か所で聞き取り・観察を実施

- 前回調査を実施したTVET機関①Aの服飾専攻の教員・学生
- TVET機関①Aの学生を受け入れている縫製工場（従業員約100名）

調査結果：TVET機関①教員の意見

教員へ聞き取りを行った結果、肯定的な意見が多かった

- 実際に使用している機械や設備を使用できる良い機会である。(教員B)
- 経験を積むために必要である。授業で学んだことを、実際の現場でやってみることが大切である。(教員C)

一方で、実務訓練の内容は不十分であると考えている教員もいた

- 実務訓練は学生のためになる可能性がある。しかし現状は、工場内では学生は高度な技術が必要なセクションには関わらせてもらえないため、習得できる職業技能が偏る。(教員A)

調査結果：TVET機関①内での学生

- 実務訓練前日は半そでシャツを型紙から作成する授業を受講
- 採寸・型紙作成・裁断・縫製・アイロンがけなど一人で全て行う
- ミシンは一人一台を自分のタイミングで使用できる
- グループごとに作業を行っており、グループリーダーが遅れている学生に声をかけ、補助しながら進める

→ 基本的には教員の指示で一斉に作業する

→ 政府の計画では、TVET機関での授業と企業内での訓練は連携している必要があるが、実際はどうか？



調査結果：工場内での学生①

- 9時～16時で実務訓練を実施（休憩1時間）
 - 工場に到着した順に空いている作業を割り当てられる
 - ほとんどの学生は、小物の縫い付け・糸の始末・荷物の運搬など、単純作業のみに関わることを許されていた
 - 一部の学生はミシンを使用できていたが、多くの学生は小物の縫い付けに従事し、数名の学生は半日以上ボタンの仕分けをしていた
- TVET機関での授業内容と学生が行う作業にはつながりが無い
- 政府の目指す形（TVET機関で基礎＋企業で実践）とは乖離

調査結果：工場内での学生②

- 学生の技能レベルを考慮して業務を割り当てている訳ではなかった
- ミシンやその他の縫製機械を使用することができたのは時間通り（もしくは時間前）に工場に到着した学生のみ
- 遅刻した学生は荷物運びや掃除をする
- 機械の数が限られているため、学生を選ぶ必要があるが、学生のレベルを把握するのは手間なので「早い者勝ち」とする（現場監督）



→ 「時間厳守」ができる学生はより良い（より身になる）作業ができる

調査結果：工場内での学生③

- 工場内には学生を指導する者がいない(全体の現場監督のみ)
- 学生は周囲の従業員から「見て」「聞いて」自ら学ぶ必要があった

例) 学生と従業員との会話

会話①

学生：終わりました。確認してください。

従業員：まだ終わっていないよ。

ここと、ここにもボタンをつけて。

学生：ここだけだと思っていました！

会話②

学生：布が硬くて針が入っていきません。
どうしたら良いですか？

従業員：そこからじゃなくて、ここから針を
刺したら簡単だよ。



- 工場内にいる人々(現場監督・従業員)は忙しく、学生の様子を見て指示や助言をする余裕が無いので、自分から話しかける必要がある

調査結果：工場内での学生③

- 積極的に周囲とコミュニケーションをとる学生
 - 現場監督にお願いして新しい縫製機械を使用させてもらっていた
 - 難しい部分やわからないことは周囲に教えてもらっていた
 - 黙って一人で作業していた学生
 - 一つの作業が終わった後にすることが分からず、ただ座っていた
 - 十分に理解しないまま間違った方法で作業を続け、工場長に叱責された
- 積極的にコミュニケーションを取る学生は、限られた中でも様々な作業を体験し、ある程度の新しい技術を習得できる
- 一人だけで作業する学生は得るものが少ない

まとめ①

- 政府・TVET教員・学生は実務訓練プログラムを「授業で基礎的な理論を学んだ後に、実践的な職業技術を習得する場」と考えている
- 受入企業側は学生を「単純作業を担う労働者」として扱っている
 - TVET機関での授業と工場内での実務に大きな差がある
 - 受入企業の体制が整っていないことや、TVET機関と受入企業間の連携不足が原因であると考えられる
- 工場での作業工程や工場内の雰囲気学ぶことはできるため、「全くなにも学べない」ということではない

学生の「期待」が「現実」と合わないことが不満に繋がっていると言える
TVET機関はプログラム内容について、企業と再度話し合う必要がある

まとめ②

- 同じ工場であっても、学生によって経験に大きな差ができており、特に「時間厳守」と「積極的なコミュニケーション」が必要不可欠であった
 - 工場では一から丁寧に説明したり面倒をみることは難しいため
 - 実務訓練に不満を持つ学生自身にも改善すべき点があるのでは？

「指示待ち」ではなく「自分で仕事を探す」ことを訓練する機会となる？

- 「時間厳守(計画性)」や「コミュニケーション力」などの非認知能力は就職時に企業が重視する能力であるため向上させることが望ましい

実務訓練は、実践的な職業技能を学ぶ場というよりも、非認知的能力を高める場として活用されるべきかもしれない